

2016年中央アジア・パミール山域レーニン峰アイスコア掘削報告 Preliminary report on the ice core drilling in Pamir-Arai Mountains, Central Asia in 2016

*竹内 望¹、藤田 耕史²、川村 賢二³、對馬 あかね⁴、宮内 謙史郎¹、堀 燿一郎¹、Vladimir Aizen⁵
、Azamat Osmonov⁶
*Nozomu Takeuchi¹, Koji Fujita², Kenji Kawamura³, Akane Tsushima⁴, Kenshiro Miyauchi¹,
YOICHIRO HORI¹, Vladimir Aizen⁵, Azamat Osmonov⁶

1. 千葉大学、2. 名古屋大学、3. 国立極地研究所、4. 総合地球環境学研究所、5. アイダホ大学、6. 中央アジア地球物理研究所

1. Chiba University, 2. Nagoya University, 3. National Institute of Polar Research, 4. Research Institute for Humanity and Nature, 5. University of Idaho, 6. Central Asian Institute of Applied Geo-Science

中央アジア山岳域の西端に位置するパミール高原は、アジアモンスーンよりも偏西風の影響を強く受ける中央アジアの中でも特別な気候条件をもつ地域である。パミール高原には数多く氷河が存在し、その融解水は下流部乾燥域の人間社会を支え、最終的にアラル海に注ぐ。この地域の水資源変動の将来予測のためにも、パミール山域の過去の気候変動の復元は重要である。2016年8月に中央アジア・キルギス共和国パミールアライ山域でアイスコアを掘削した。掘削した氷河は、レーニン峰（7134m）から西へ約20km離れた標高約5300mの氷帽頂上である。3本のアイスコアを掘削し、1本目は約7mで水が現れ、2本目は約12mでクレバスに達し、3本目は約37mで底部岩盤に達した。底部に達した3本目のコアは、平均密度は847 kg m⁻³で、15m以深はほぼ再凍結氷であった。掘削高温度の測定の結果は、底部で-6.3℃であった。以上の結果は、パミール山域では5300mの標高でも氷河表面は融解再凍結が起こること、また掘削したアイスコアは過去環境復元の目的としては限定的な試料であることを示している。アイスコアは今後、同位体、化学分析等が進められる予定である。

キーワード：中央アジア、アイスコア、パミール

Keywords: central asia, ice core, Pamir